様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３２６８５
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０４８０

研究課題名（和文）東アジア言語の対人評価行動に関する研究

研究課題名（英文）A Study of Interpersonal Linguistic Behavior in Positive/Negative Situations in East Asian Languages.

研究代表者
金　庚芬（KIM, KYUNGBOON）

明星大学・人文学部・准教授

研究者番号：５０５１３８９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：この３年間の研究成果は、（１）日本語、韓国語、中国語、モンゴル語の評価行動に関するアンケート及びインタビューデータを収集、分析できたこと、（２）日本、韓国、中国の言語話者の評価行動に関する意識、それに影響する因子、また表現方法を分析できたこと、（３）日本、韓国、中国の学会にて３言語話者の対人評価行動の比較分析結果を発表したことが主な成果と言える。

研究成果の概要（英文）：The main outcome of this three-year project can be summarized as follows: (1) the creation of new data collections and analyses of questionnaire survey and interview in Japanese, Korean, Chinese and Mongolian; (2) the analysis of the conscious, factor and expression regarding interpersonal linguistic behavior in positive/negative situations; (3) the presentations of a comparative study on the interpersonal linguistic behavior at conferences in Japan, Korea and China.

研究分野：社会言語学

キーワード：対人評価行動　東アジア言語　日韓中蒙　肯定的場面　否定的場面　ほめ　けなし

１．研究開始当初の背景

「ほめ」と「けなし」は、相手の価値をどのように認め、それをどのように伝えるかという対人評価にまつわる言語行動である。相手の価値をどのように認め、それをどのように伝えるかという評価にまつわる言語行動は、対人関係に直接的に影響しており、また言語によって異なる傾向が表れることが明らかになっている。この対人評価行動の全体像を明らかにするためには、肯定的・否定的の双方向からのアプローチが求められる。

本研究者らによるこれまでの研究結果、及び予備研究の結果によると、「ほめ」や「けなし」には、外見や行動、性格などの何をほめる／けなすのか、何をほめない／けなさないのか、どのような表現を用いるのかなどに関して、言語間での類似点と相違点が現れている。例えば、肯定的・否定的評価語の種類や語彙的特徴における異同や、表現の具体性と説明の細かさなどにも違いがある。なぜ、各言語話者は「ほめ／けなし」行動を行う、行わないか、またその表現方法を見ることにより、相手との対人関係をどのように調整し、維持しているのか、さらにそこに反映されている規範、ルールのようなものが浮き彫りになるであろう。

本研究では、このような「ほめ／けなし」という対人評価行動に注目し、さらに東アジアという、異なる言語でも歴史や文化を共有する部分のある地域の４つの言語を対照することとする。

対人関係における肯定的評価行動である「ほめ」と否定的評価行動である「けなし」を同軸に置き、分析する試み、及び４つの言語を対照することは本研究の斬新性と言えるであろう。

２．研究の目的

本研究では、日本語、韓国語、中国語、モンゴル語における対人評価行動、具体的には「ほめ」と「けなし」を取り上げ、その特徴を分析する。分析を通して、各言語における言語使用上の類似点と相違点を比較検討し、対人関係調整の観点から４言語が共通して有している部分と、個別に持っているルール・決まりを明らかにすることを目的とする。

計画している具体的な研究項目は、４つの言語における①対人関係、場面別の「ほめ／けなし」行動の有無、その影響要因、②対人関係、場面別の「ほめ／けなし」に用いられる表現方法の２つである。

３．研究の方法

本研究の目的を達成するために、研究の方法としては、因子分析用アンケートと談話完成型アンケートの二つのアンケートと、フォローアップインタビューを用いる。それにより、量的分析と質的分析が可能となる。

まず、因子分析のためのアンケートでは、「ほめ／けなし」の対象になりうると考えた事柄２０項目を外見、持ち物、性格、遂行などのカテゴリーからバランスをとって設定した。次に、対人関係を２通り（知り合い／親友）に設定し、計４０項目を作成した。これをそれぞれ７段階で評定してもらい、回答に影響する因子を分析する。４つの言語それぞれ200程度の回答を集めるが、この数量は、項目に対して３倍以上であり、因子分析を行うには十分である。

予備調査の結果から、因子には、「外見」「所持物」「性格」など、予め仮定したカテゴリーが抽出される場合と、「努力の反映」「外部から観察可能なもの」などが抽出されることが分かっている。これらを言語ごとに抽出し、比較することにより、「ほめ／けなし」に影響する因子の異同を明らかにする。

次に、談話完成型アンケートでは、先行研究及び予備調査の結果に基づき、「ほめ／けなし」の場面を「外見、性格、所持物、遂行、家族」の５つの場面に設定した。各々の場面での相手を「知り合い／親友」という親疎関係に分け、「ほめ／けなし」行動の有無を聞き、行動するときの表現を書いてもらう。また、行動しない場合はなぜしないかを書いてもらう。ここでは、場面や対人関係による「ほめ／けなし」行動の有無、肯定的・否定的評価語、表現方法の特徴を明らかにする。各言語の特徴を分析した後、4言語の対照を行う。

さらに、因子分析と談話完成型アンケートの分析によって明らかになる「ほめ／けなし」行動の特徴をより深く掘り下げるために、フォローアップインタビューを行う。各母語話者の人に依頼し、「ほめ／けなし」行動に関する意識と要因を詳しく探る。また、アンケートの結果に関する協力者の意図や解釈を確認する。

４．研究成果

３年間を通し、上記の研究方法により、（１）日本語、韓国語、中国語、モンゴル語の評価行動に関するアンケート及びインタビューデータを収集、データ整備できたこと、（２）日本、韓国、中国の言語話者の評価行動に関する意識、それに影響する因子、また表現方法を分析できたこと、（３）日本、韓国、中国の学会にて３言語話者の対人評価行動の比較分析結果を発表したことが主な成果と言える。以下に、これらについて報告する。

（１）日韓中蒙の評価行動に関するアンケート及びインタビューデータ収集について

まず、アンケート調査の概要は下記のようである。

日本語	時期	2012 年 1～5 月
	地域	東京とその周辺
	人数（男/女）	202 名（112/90）
	平均年齢	19.5 才
韓国語	時期	2011 年 11 月~2011 年 5 月
	地域	ソウルとその周辺
	人数（男/女）	217 名（82/135）
	平均年齢	22.1 才
中国語	時期	2012 年 10 月
	地域	大連
	人数（男/女）	209 名（104/104、不明 1 名）
	平均年齢	19.8 才
モンゴル語	時期	2012 年 12 月、2013 年 6 月
	地域	中国内モンゴル、北京
	人数（男/女）	200 名(150/44､不明 6 名)
	平均年齢	20.8 才

また、インタビュー調査は、日本・韓国・中国は､2013 年 12 月～2014 年１月にかけて、上記の同じ地域の協力者計 60 名を対象に実施した。なお、モンゴルでの調査は、2014 年８月、10 名を対象に行った。

なお、アンケート調査及びインタビュー調査により得られた回答は､12 名の研究協力者によりすべて電子データとして整備された。また、韓国語、中国語、モンゴル語の回答については、すべて原語入力と日本語の翻訳作業も行った。

（２）日本、韓国、中国の評価行動に関する意識、それに影響する因子、表現方法の分析結果

①日韓中の評価行動に関する意識

＜肯定的場面＞

まず、親疎別の言及率を分析した結果、日韓中ともに、親友のほうが知り合いよりほめやすい、ほめることが分かった。また、２０項目に対する評価度合の順序は、３言語また親疎ともに、同様の結果で、評価する事柄への違いもさほど見られなかった。一方で、国ごとに異なる特徴も見られた。３か国の中では、中国で最も積極的な評価が行われており、その傾向は、親疎に関わらず共通していた。韓国は、親疎による差が最も激しく、肯定的に評価する際に、相手との関係が強く影響されると言える。また、日本は、親疎による差が中韓に比べ最も少なく、親疎による影響がもっとも少ないことが分かった。

＜否定的場面＞

日韓中ともに、否定的な場面では、全体的に言及率が低く、評価の積極性は見られないことが分かった。また、親友のほうが知り合いより否定的に評価しやすいことが分かった。また、２０項目においては 、最も否定的な評価が高かった「時間を守らない」と、最も低かった「貧乏だ」を除くと、国別、親疎別に若干の差が見られた。一方、国ごとの特徴を見ると、韓国では、親疎ともに、日中に比べ相対的に積極的に否定的な評価が行われていた。また、親疎による差も最も激しく、肯定的評価場面と同様に相手との関係が強く影響することが分かった。中国は、否定的評価場面では、積極性は見られず、とりわけ、知り合いに対する否定的評価は最も低かった。このことから、中国では、肯定的評価場面では積極的にほめる一方、否定的評価場面では行動の取り方を逆転させ、評価を控えていることが明らかになった。これらに対して、日本は、否定的評価場面においても、親疎による差が中韓に比べ少なく、親疎による影響が最も少ないことが確認できた。

②評価行動に影響する要因の分析結果

＜肯定的場面＞

まず、3 カ国の類似点として、第一に、抽出された因子数に親疎による違いはないということが挙げられる。日本は親疎ともに 3 因子、韓国と中国は親疎ともに 4 因子ずつ抽出されている。第二に、日本の対親友を除くすべての群で、肯定的に評価されやすい項目が１つの因子にまとまるのではなく、異なる因子に分かれているのに対し、あまり積極的に評価しない項目は一つの因子に集約されていることが挙げられる。三点目は、3 カ国の大学生に共通して、努力による成果に関連する項目が肯定的に評価される一方、物質的豊かさに関わるもの、あるいはそれに由来するものにはあまり積極的に評価しないことである。

次に、相違点をまとめると、まず、親疎による違いに関しては、韓国では差が顕著に現れることから、韓国の大学生社会では、相手との親疎関係により、接し方が違っていることが推察される。これに対し、日本では、親疎による差がさほど見られないことから、日本の大学生社会においては、親疎関係が肯定的に評価するか否かに大きく影響しないと言える。一方、中国では、親疎を問わず、３カ国の中で最も積極的に相手を肯定的に評価している。

＜否定的場面＞

まず、3 カ国の類似点をまとめると、対親友場面でより多くの因子が抽出されていることが挙げられる。これは、逆に言えば、知り合いに対しては否定的に評価する項目が限られていると言い換えてもいい。親友に対

しては、否定的に評価する割合が相対的に高い項目が１つの因子にまとまるのではなく、異なる因子を形成している。つまり、3 カ国とも、親友への否定的評価は、単一の心理に基づいているわけではない。２つ目の類似点は、不遇な境遇やセンス・技能のなさを否定的に評価しないことである。これは、改善の見込みがないためだと考えられる。韓国で親友が外国語が全然できないことのように、改善の見込みがあるにもかかわらず、改善する意志がない場合には、センスや技能に関わる事柄であっても、やはり否定的に評価されている。3つ目の類似点として、服装や面倒見、時間遵守を、３国ともに、人と関わる上で整える、あるいは守るべきこととし、これを逸脱したものを否定的に評価していることが挙げられる。特に、中国では、知り合いに対しても家族仲の悪さを否定的に評価することが分かる。

一方、3 カ国で異なる点としては、韓国と中国の対知り合い場面では、一つだけの因子が認められたのに対し、日本は３つの因子が見られたことである。また、もう一つの相違点として、同じ項目が国によって異なる捉え方をされていることが挙げられる。例えば、いつも不潔な服装やださい髪型をしていることや、ボロボロのかばんを持っていることは、日本と中国では、だらしなさを表すものとして捉えられているが、韓国では、外聞への無関心さを表すものとして捉えられている。つまり、日本と中国が本人の性向の問題として捉えているのに対し、韓国は、より外向きに、他人にどのように映るかという観点から捉えている。また、家族仲や面倒見が悪いことは、日本は無気力さの表れと捉え、韓国は改善意志のなさ、あるいは、外聞への無関心さ、中国は協調性のなさと捉えている。ここからは、例えば、中国では、協調性を保つものとして家族仲を良くすべきだ、面倒見がよくあるべきだ、という価値観が読み取れ、また韓国では、良くないのであれば改善すべきだ、改善して外聞を維持すべきだ、という価値観が伺われる。他にも、親友がスタイルが悪いことは、日本では不遇な境遇の表れと捉え、韓国は外聞への無関心さの表れと捉え、中国はだらしなさの表れと捉えている。このような捉え方の違いにより、スタイルは、日本では否定的評価が避けられるが、韓国では、高い割合で否定的に評価されている。このように、同一の項目が国によって異なる捉え方をされていることは、本研究で、肯定的・否定的場面の両方から評価行動を取り上げ、また、国別に因子分析を施したからこそ明らかになったものである。

③評価行動に用いられる表現方法の分析結果

日韓中の肯定的・否定的対人評価の場面における表現を分析した結果、３言語の共通点と個別性が明らかになった。まず、共通点は、肯定的評価の場面での言及率が否定的場面より多く、評価の表現も肯定的場面に多いことである。否定的場面では評価の表現は減り、他の表現の使用率が高くなる。また、評価の対象によって言及率には差があり、髪型や掃除は言及しやすく、成績や家族仲は言及しにくいことが分かった。

個別性は、まず日本は表現の分類項目及び組み合わせの数が中韓に比べて少なく、淡々と表現していることである。日本は全体的に事態、行動、状況などに言及するにとどまっており、それ自体が何らかの評価を示唆していることが読み取れる。次に、韓国は肯定的場面と否定的場面での言及率の差が最も激しく、良いことは思い切り評価し、悪いと思うことには言及をためらっていることが伺える。日中に比べて肯定的場面では羨望や願望、祝福などの感情の表現がかなり多く、否定的場面では共同行為や相談役になることを提案していることから仲間意識や何かを共有しようとする意識が読み取れる。中国は、肯定的・否定的場面での言及率の差が少なく、評価的に述べることが一般的であった。また、肯定的場面では、感情表現が少なく、否定的場面では当該行動への否定的評価を述べたり、注意することで相手と一定の距離を置きながら、その行動を正そうとしていることが分かる。また、情報、行為、恩恵などを要求する表現が日韓に比べて多かった。

（３）日本、韓国、中国の学会にて３言語話者の対人評価行動の比較分析結果を発表

本研究の分析成果である（２）の内容を中心に、日韓中の学会にて成果発表を行い、東アジア言語における言語行動の特徴を積極的に発信することができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① 関崎博紀・許明子　「日中大学生のパーソナル・テリトリーへの言及に関する社会心理学的研究」、『パーソナル・テリトリーとポライトネス・ストラテジーに関する日韓中対照研究』、平成 23－25 年度　科学研究費助成事業　基盤研究(C)(研究代表者：許明子)、研究成果報告書、pp.16-48、2014 年、査読無

② 金庚芬・関崎博紀・趙海城「日韓大学生の評価行動に関する社会心理学的研究(1)-「ほめ」の場合-」、『社会言語科学会第 31 回研究大会発表論文集』、pp.174-177、2013 年、査読有

③　関崎博紀・金庚芬・趙海城「日韓大学生の評価行動に関する社会心理学的研究(2)-「けなし」の場合-」、『社会言語科学会第 31 回研究大会発表論文集』、pp.178-181、2013 年、査読有

④　趙海城・金庚芬・関崎博紀「中国大学生の『ほめ』行動に関する社会心理学的研究」、『第 14 回東アジア日本語日本文化フォーラム予稿集』、pp.103-108、2013 年、査読有

⑤　金庚芬・関崎博紀・趙海城「肯定的/否定的場面における日本語・韓国語・中国語の表現分析−相手が親友の場合−」、『社会言語科学会第 32 回研究大会発表論文集』、pp.78-81、2013 年、査読有

⑥　金庚芬「친소 관계/ 장면별 칭찬 행동 의식에 관한 한일대조연구（親疎関係/場面別ほめ行動の意識に関する日韓対照研究）」、『韓国社会言語学会 2012 年秋季学術大会予稿集』、pp.164-171、2012 年、査読有

〔学会発表〕（計５件）

①　金庚芬・関崎博紀・趙海城「日韓大学生の評価行動に関する社会心理学的研究(1)-「ほめ」の場合-」、社会言語科学会第 31 回研究大会、2013 年、東京・日本

②　関崎博紀・金庚芬・趙海城「日韓大学生の評価行動に関する社会心理学的研究(2)-「けなし」の場合-、社会言語科学会第 31 回研究大会、2013 年、東京・日本

③　趙海城・金庚芬・関崎博紀「中国大学生の『ほめ』行動に関する社会心理学的研究」、第 14 回東アジア日本語日本文化フォーラム、2013 年、上海・中国

④　金庚芬・関崎博紀・趙海城「肯定的/否定的場面における日本語・韓国語・中国語の表現分析−相手が親友の場合−」、社会言語科学会第 32 回研究大会、2013 年、松本・日本

⑤　金庚芬「친소 관계/ 장면별 칭찬 행동 의식에 관한 한일대조연구（親疎関係/場面別ほめ行動の意識に関する日韓対照研究）」、韓国社会言語学会 2012 年秋季学術大会、2012 年、ソウル・韓国

６．研究組織

(1)研究代表者

金庚芬（KIM KYUNGBOON）
明星大学・人文学部・准教授
研究者番号：50513892

(2)研究分担者

関崎博紀（SEKIZAKI HIRONORI）
筑波大学・人文社会系・助教
研究者番号： 30512850

趙海城（ZHAO HAICHENG）
明星大学・人文学部・准教授
研究者番号：90595084

(3)研究協力者

（調査票整備協力者）
塔娜（内モンゴル師範大学）
陳臻渝（中国華僑大学）
白麗萍（東海日中貿易センター）

（アンケート・インタビュー実施協力者）
阿久津博紀（筑波大学情報学群学類生）
李京哲（韓国東國大学校）
任栄哲（韓国中央大学校）
王海鳳(内モンゴル師範大学)
オム・サンソブ（韓国東國大学校大学院生）
亀井敦郎（筑波大学大学院人文社会科学研究科大学院生）
邢文柱(大連海事大学)
蔡鳳林（中央民族大学）
丁暁傑(内モンゴル師範大学)
萩原宥子（筑波大学人文学群学類生）
暴景昇(遼寧師範大学)
朴良順（韓国中央大学校）
劉雅静(対外経貿大学)

（データ入力、整備協力者
赤羽（新井）優子（筑波大学大学院人文社会科学研究科大学院生）
林始恩（筑波大学大学院人文社会科学研究科大学院生）
王金博（筑波大学大学院人文社会科学研究科大学院生）
朱炫姝（筑波大学大学院人文社会科学研究科大学院生）
沈珂平（筑波大学大学院人文社会科学研究科大学院生）
徐藝珍（筑波大学人文学群）
孫思琦（筑波大学大学院人文社会科学研究科大学院生）
盧熙周（筑波大学社会・国際学群学類生）
哈斯（昭和女子大学大学院生活機構研究科大学院生）

許允瑄（筑波大学大学院人文社会科学研究科大学院生）
馬福山（呼和浩特民族学院）
屋名池明（筑波大学大学院人文社会科学研究科大学院生）

※所属はいずれも当時